

医療の世界で生きる 女性たち

WOMAN in MEDICAL

京都市／産婦人科医 池田裕美枝さん



「女性総合医療の実現のため 各科との橋渡しとなれたら」

午前の診察を終え、慌ただしく取材場所にあらわれた池田さん。可憐な見かけによらず、何でも率直にものを言う。聞けば、大阪で四人兄弟の末子として揉まれて育ったというから、嫌が応にもコミュニケーション能力が身に付いたのだろう。じつは頼りがいのある女性なのだ。医師を志す原点にあったのは、身体の仕組みへの興味。「人は悲しくなるとなぜ目から「水」が出るのか」と考えてしまう幼き池田さんはその後、内科医となり、仕事の幅を広げるために産婦人科を学んだ。産婦人科の診察で心掛けることは、「患者さんに何でも話してもらえようようにする」こと。女性の人生におけるビッグイベントである妊娠、出産に際し、不安でいっぱい患者の心を解きほぐすのも大切な仕事のひ

とつた。だから「先生の顔を見るとほっとする」という患者のひとつが何よりも嬉しいのだという。「女性の総合医療をやりたいたいで」と目標を語る池田さん。内科や産婦人科といった身体の分野から、精神科や心療内科といった心の分野まで幅広く女性をサポートする総合医療だ。日本ではまだ科として確立するに至っておらず、各科との調整だけでも大変そうだ。「他職種連携が好きなので（笑）」という資質は中高生時代での演劇部にまで遡って見出される。様々な役割分担で成り立つ演劇舞台において、持ち前のコミュニケーション能力で、多くの橋を渡してきた。それは医療現場に舞台を移した今も発揮されていくことだろう。



京都市の洛和会音羽病院にて。大学1年生から始めたお茶が趣味で、いわく「茶道の簡素化された無駄のない所作は、手術が上手な先生の動きにとてもよく似ている」のだそう。家事や育児をサポートしてくれる「よくできた」ご主人と一緒に、1歳半になるお嬢さんを連れて京都のお寺を巡るのが楽しみのひとつだという。

文／斎藤重雄 写真／中谷翔